九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[038]九州大学大学文書館ニュース

https://hdl.handle.net/2324/2203019

出版情報：九州大学大学文書館ニュース. 38, pp.1-, 2014-11-30. 九州大学文書館
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

ISSN 1881-3496

九州大学
大学文書館ニュース

第38号　2014.11.30

目　次

箱崎キャンパス初期の門の発見……2
史料紹介『昭和十四年度　創立関係書類綴
九州国際文化協会』……6
九州大学大学文書館名簿……9
大学文書館日誌抄録……9
百年史編集室日誌抄録……12

箱崎キャンパスのレンガ塀に隠れた門

九州帝国大学の創立とともに誕生した箱崎キャンパスは、今年で104年目を迎えた。用地の拡大や、建物の新築・増改築等を繰り返し発展してきたキャンパスには、様々な時代に作られた建造物が残っている。それらの建造物を詳しく見ていくと、いろいろと趣向を凝らせた意匠や、今となっては不思議な構造が目に入り、なぜそういうデザインになっているのか疑問が湧いてくる。そうした疑問を元に理由を調べていくと、昔のキャンパスの姿を知る手がかりになる。上の写真は、一見ただの塀の一部だが、よく見ると中央の柱二本だけがほかの柱と違い、足元までレンガ造りである。大学文書館資料を元に、この柱の謎に迫った（詳しくは本文の松本隆史「箱崎キャンパス初期の門の発見」を参照）。

箱崎キャンパス初期の門の発見

松　本　隆　史

はじめに

九州大学は、箱崎キャンパスから伊都キャンパスへの移転事業を2005年度（平成17）から行っており、その移転の作業も大詰めを迎えている。箱崎キャンパスは、1911年（明治44）の九州帝国大学（現・国立大学法人九州大学）創立時に、工科大学のキャンパスとして新設されたものである。キャンパス内には、大正期から昭和の初めにたてられた歴史的建造物が現存しており、私が所属する総合研究博物館の常設展示室も、1930年（昭和5）に完成した旧工学部本館3階にある。

私は、テニュアトラック制教員として、2012年に総合研究博物館助教に着任した。私の専門はメディアデザインというもので、新しいメディアやコンテンツを開発し博物館の開示に活用する研究を行っている。専門がハードウェアのデザインを扱う事もあって、最近では博物館に関連する物品や建造物などの設計・意匠について調査することが増えている。それら調査対象の由来を理解するために大学の歴史を振り返る必要が多々あり、同じ旧工学部本館の1階にある大学文書館を尋ねては、昔の大学資料を閲覧させていただいている。

今年に入ってから、箱崎キャンパスでは建物の取り壊しなども始まり、移転完了にむけた立ち退きの準備が加速している。博物館としては、キャンパス内に存在する貴重な資料を保護・移設し、同時に箱崎キャンパスの記録を残す作業が急務となっている。

今回この記事で報告するのは、そうした状況の中で見つけた小さな門である（表紙写真）。この門は、ずいぶん昔に使われなくなり、多くの人々の記憶から忘れられていたようであるが、調べてみると箱崎キャンパスが成立した初期に造られたものであるようだ。

門の発見

地下鉄箱崎九大前駅から、旧工学部本館や大学本部があるゾーンに向かうには、駅2番出口近くの松原門から構内に入り、左手に総合研究博物館第一分館（旧工学部知能機械実習工場）と旧工学部2号館（移転により既に閉鎖）を見ながら、工学部通用門のあたりまでまっすぐすすむことになる。その間、右手には、正門と統一されたデザインの、レンガ造りの柱が塀として並んでいる。毎日、駅と旧工学部本館との間を行ったり来たりしながら、何か博物館資料と関連するものがないかと思っていたら、不意に気になるものが目に飛び込んで来た。レンガ柱のデザインが、2本だけ、他と違うのである。

問題の柱は、工学部通用門に近い2本である。サイズは他の塀柱と同じである。しかし、他の塀柱はすべて、上から「石・レンガ・石・石」というパターンで出来ているのに対し、この2本だけが「石・レンガ・石」と、地面に近いところまでレンガ造りになっている。デザイン的な見地からして、パターンが違うということは何か意味があるに違いない。

その2本の柱の間から大学の外を見ると、お寺（一光寺）に向かってまっすぐ小道がのびている。柱をよく見ると、蝶番を外したような跡がある。柱と柱の間隔はこの2本の間だけが狭い。目の前に電柱やカーブミラーが立ち並び、すっかり塀のふりをしているが、恐らくこれは門に違いないと思った。

正門を参考に、デザインの観点で門と塀の違いを見てみる。すると、正門は他の塀柱とは区別され、足下までレンガ造りの意匠が施されている事に気づく。この柱2本も同じデザインルールで造られており、ますますこれは門であるとの確信を深めた。しかし、この門には不可解な事がある。まず、工学部通用門にあまりにも近すぎ、存在の理由がわからない。また、2号館建物の入り口は、この門よりも西にずれた位置にあり、門との位置関係が一致しない。つまり、柱のデザインは門のデザインと一致するが、門の位置が現在のキャンパスのデザインと一致しないのである。大学の外と中を繋ぐ門をどこに設置するかということは、キャンパスの設計上重要なはずである。この設計上の不一致がとても気になり、この門に「幻の門」と仮の名前を付け、皆に聞いてまわることにした。

門の調査の開始

まず考古学がご専門の総合研究博物館の岩永省三先生と舟橋京子先生に幻の門のことを尋ねると、直ちに現場を確認しに行ってくださった。確かに、後に塀に改造した門であろうとのことであった。しかし、お二人ともこの門の存在には今まで気づかず、話題になったこともなかったという。

ウェブで検索をして行くと、元寇防塁調査に関する資料[1]で引用されている1933年（昭和８）の平面図には、この門が描かれていることがわかった。そこで、大学文書館の折田悦郎先生にこの門の事を尋ねてみたところ、確かに古い図面に門のようなものは確認していたが、現存するとは思わなかったとのことであった。早速、開学年度から順に『九州帝国大学一覧』の平面図を閲覧し、幻の門の成立時期を検討することにした[2]。

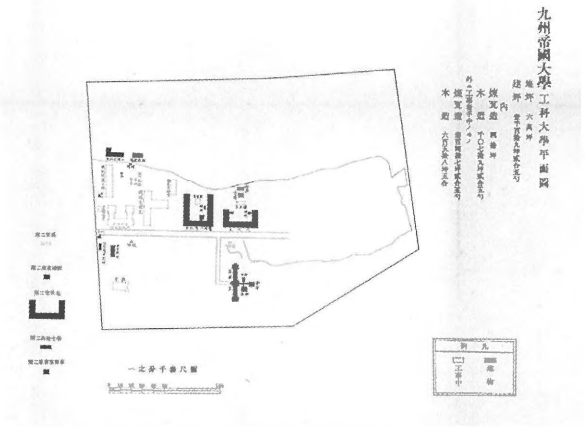

図１：『九州帝国大学一覧 従明治四十四年 至明治四十五年』（1911年度）平面図

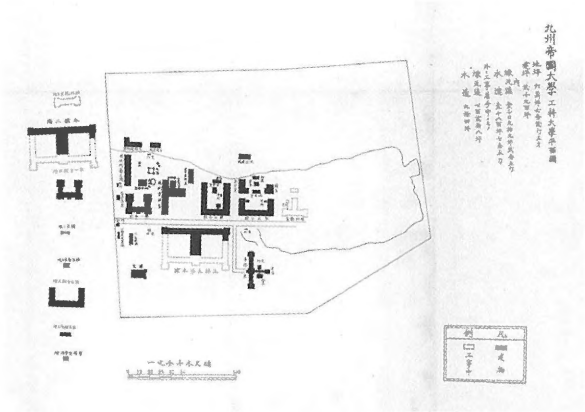

図２：『九州帝国大学一覧 従大正元年 至大正二年』（1912年度）平面図

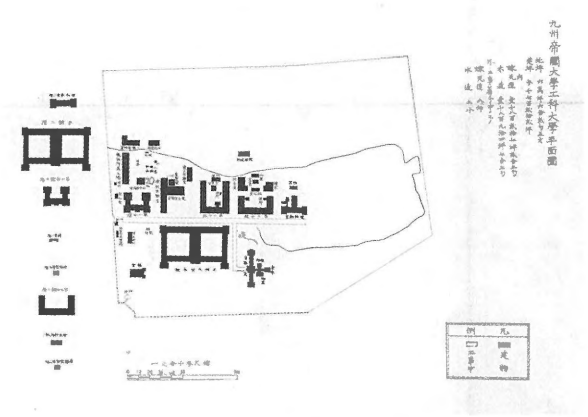

図３：『九州帝国大学一覧 従大正二年 至大正三年』（1913年度）平面図

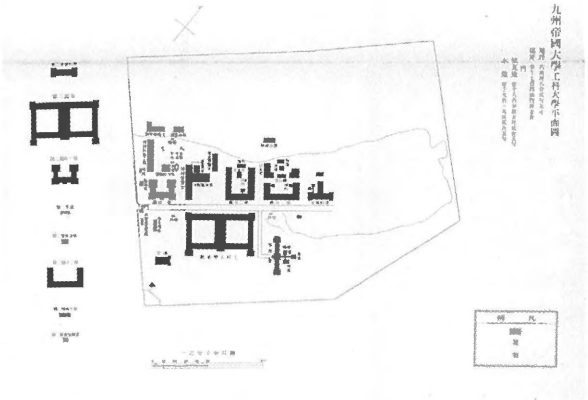

図４：『九州帝国大学一覧 従大正三年 至大正四年』（1914年度）平面図

箱崎キャンパスの成立過程

『九州帝国大学一覧』の開学当初の平面図では、完成した建物が黒で、建設途中のものが白抜き破線で描かれている。工科大学が設置された1911年度（明治44）には、多くの建物はまだ建設中で、工科大学本館は全く存在していない（図１）。当時は、正門もまだ無く、工学部通用門の箇所がメインの入り口として機能している。

翌1912年度（大正元）になると、工科大学本館は建設中であり、建物後方だけが利用されはじめているなど、段階的にキャンパスが整備されて行ったことがわかる（図２）。

３年目の1913年度（大正２）になり、漸く、工科大学本館を含む主な建物がすべて完成している（図３）。塀と正門門衛は、この年に初めて建設中として図面に登場する。なお、この年度の終わりには、工科大学一期生の卒業と工科大学の本館の落成（1914年３月）を記念したイベントが行われたという[3]。

工科大学設置から４年目の1914年度（大正３）の平面図（以下、1914平面図）では（図４）、正門門衛と塀は既に完成しており、凡例からは「工事中」が消えている。『九州帝国大学一覧』巻末の写真にも、レンガ造りの正門と塀越しに写された工科大学本館の姿がある。以上のことから、段階的に作られた最初期の箱崎キャンパスは、工科大学本館と正門・塀の完成をもって、1914年（大正３）頃に一旦完成したと考えることができる。

この時造られた正門門衛所は、最近の近代建物調査において、箱崎キャンパスに現存する最も古い建造物として報告[4]されている。はたして、幻の門は、正門と同じく、この時造られたものであろうか。

門が造られたのはいつか？

1914平面図に描かれた門の位置を詳しくみてみよう。まず、正門はこのとき造られたものであるが、現在とは違う角度で設置されていることがわかる。これは、1924年（大正13）頃から始まった旧法文学部の整備の際に、敷地が拡張され、正門と門衛所が移築されたためである[5]。

次に、現在の工学部通用門の場所も、門の存在を示すように塀が凹んで描かれている。大学文書館の写真を調べると、立派なレンガ造りの工学部通用門が1919年（大正８）の写真に写っている[6]。当時の工学部通用門は、本館や正門と一致したデザインで造られていた事がわかった。

さて、幻の門の位置には、「第一分館」の裏手に、「附属機械工場」や「水力実験室」などへの通路があったことが建物の配置から確認できる（図５）。しかし、この平面図では門と塀が同じ二重線で描かれていて、ここに門が存在したかどうかはわからない。平面図で塀と門が明確に書き分けられるようになり、幻の門が図面に登場するのは、ずっと後年の1928年（昭和３）版からであった[7]。

そこで、現在のレンガ造りの塀柱・門の構造をより詳しく確認してみた。現在は、松原門から農学部近くまで、1914年（大正３）当時より長い範囲にレンガ造りの塀が整備されている。それら塀柱のレンガ素材を見てみると、「小さいレンガ[8]」、「大きいレンガ[9]」、「レンガ風タイル」の３つに分類できる事がわかった。

「小さいレンガ」は、主に正門・正門門衛所などに使われており、「大きいレンガ」は、主に旧法文学部の周囲に使われている。「小さいレンガ」はキャンパス成立の頃（1914年頃）使われたもので、「大きいレンガ」は法文学部整備の頃（1924年頃）に使われたものであるとの仮説をたてると、柱ごとのレンガの違いが正門移築などの事実とも対応していることが確認できた[10]。なお、「レンガ風タイル」は、塀に柵を付け替えた跡がないことなどから、より近年になって整備されたもののようだ。

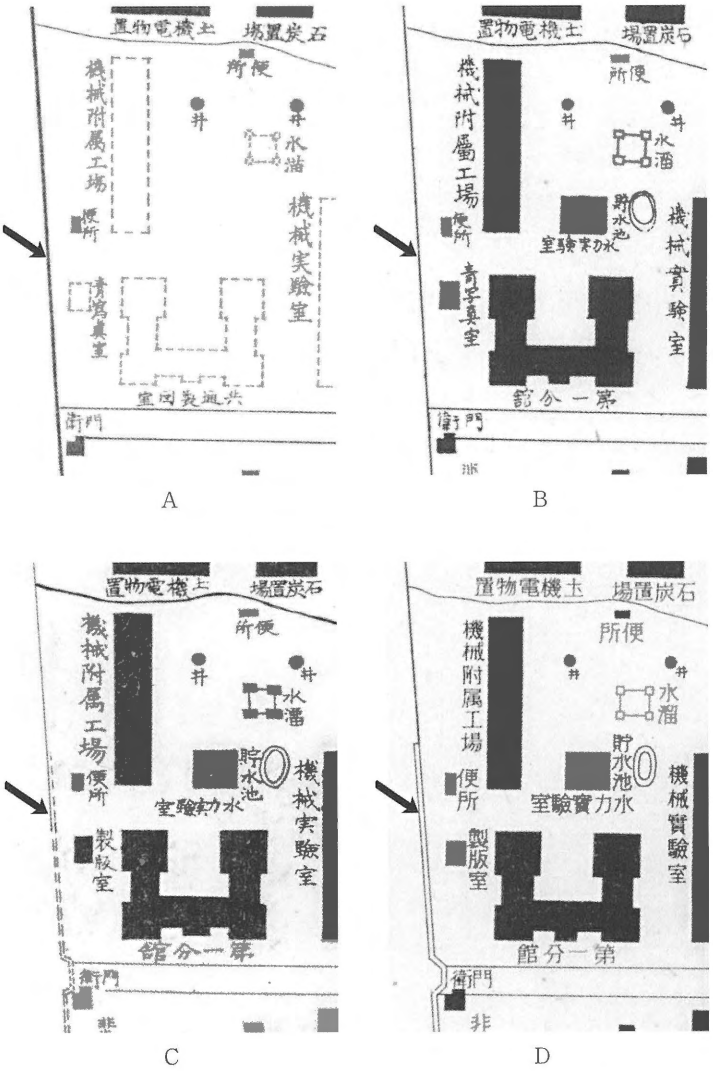

図５：キャンパス成立初期の幻の門周辺。矢印（加筆）が幻の門の位置。『九州帝国大学一覧』平面図　1911年度（A）1912年度（B）1913年度（C）1914年度（D）

幻の門とその付近の塀柱では、「小さいレンガ」が使われている。また、幻の門から左４本の塀柱までは「小さいレンガ」を使っており、そこから先が「レンガ風タイル」のものに切り替わっている。これは、1914平面図に描かれた塀が「附属機械工場」横で途切れている箇所と一致する。幻の門の、当時の写真や図面はまだ見つかっていないが、いくつかの特徴を総合すると、幻の門は正門の整備と同時期の1914年頃に造られた可能性が高いと思われる。

なお、幻の門の近くにあったレンガ造りの工学部通用門は、現在は拡張された道路に合わせた幅の広いものに取り替えられており、失われてしまっている。この道路拡張は、戦後、工学部２号館の建設の頃から始まり、複数の区画に分かれていた付近の初期の建物群が、一つの大きな建物に置き換えられた。新しい建物は、道路拡張によって西側へずれて配置されており、建物入口も初期の区画を無視して造られたようで、幻の門の場所に通路はなくなってしまった。この頃からか、この門は使われなくなり、塀に改造されて、いつしか存在も忘れ去られてしまったようだ。これが、この門を見つけたときに、現在のキャンパスの構造と位置関係が合わず、不思議に感じた理由だと思われる。

まとめ

ふと見つけた小さな門であったが、この幻の門は、正門や門衛所と同時期に整備された、箱崎キャンパスに現存する最初期の建造物の一部である可能性がある[11]。今後、建築や文化財などの専門家による、より詳細な調査を期待している。

この門のある場所は、開学当初から存在していた「機械附属工場」一帯への入り口であったことも確認できた。当時「機械附属工場」に導入された工作機械類は、戦後に現在の旧工学部知能機械実習工場へ移され、今は総合研究博物館資料として現存している。これから総合研究博物館が、伊都キャンパスへ機械類を移転する際には、今回のような調査結果を反映し、新しい建物や展示の設計に、箱崎キャンパスのコンテキストを引き継ぐ作業をしていく必要がありそうだ。一度は忘れられた門であったが、物として現存したことで、箱崎キャンパスの成立過程を振り返るきっかけを与えてくれた。今回の幻の門の検証は歴史的資料の持つ意味を改めて考えさせられる出来事であった。

謝辞：

この門の調査と原稿執筆にあたって多くのアドバイスを下さいました、大学文書館折田悦郎教授、総合研究博物館岩永省三教授、三島美佐子准教授、舟橋京子助教に、感謝申し上げます。

1）田尻義了「九州大学キャンパスに眠る埋蔵文化財：元寇防塁を中心に」貴重文物講習会（第39回），配布資料，九州大学，2010年。http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/recordID/18759
2）九州帝国大学『九州帝国大学一覧 従明治四十四年 至明治四十五年』1912年。九州帝国大学『九州帝国大学一覧 従大正元年 至大正二年』1913年。九州帝国大学『九州帝国大学一覧 従大正二年 至大正三年』1914年。九州帝国大学『九州帝国大学一覧 従大正三年 至大正四年』1915年。
3）折田悦郎「史料紹介（7）九州帝国大学工科大学要覧」『九州大学大学史料室ニュース』第７号，1996年。
4）「九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の調査ワーキンググループの評価報告」第５回九州大学跡地利用将来ビジョン検討委員会，参考資料，九州大学，2012年。http://www.city.fukuoka.lg.jp/jutaku-toshi/m-suishin/machi/hakozakicampus-shoraivision-iinkai_5.html
5）『九州大学百年史写真集』2011年，20-21頁，39頁。
6）「工学部通用門」（大正８年撮影），大学文書館所蔵。
7）九州帝国大学『九州帝国大学一覧 附第八臨時教員養成所一覧 昭和三年』1928年。
8）「小さいレンガ」のサイズは（約167mm×約107mm×約60mm）で、個体差が数mmある。
9）「大きいレンガ」のサイズは（約230mm×約110mm×約60mm）で、個体差が数mmある。
10）但し、農学部側の塀レンガの変わり目については、1914平面図と一致しておらず、この点については塀の移築などの可能性についてより詳細な検討が必要である。
11）その後、大正２年度の正門・門衛所・通用門・塀の工事に関する書類（大学文書館資料2011-00019 二四）があることがわかり、手がかりになりそうである。この書類に、通用門弐カ所との記載があった。

（九州大学高等研究院・総合研究博物館助教）

史料紹介『昭和十四年度　創立関係書類綴　九州国際文化協会』

山　本　尚　史

1．九州国際文化協会の概要

1939年（昭和14）９月16日午後３時、九州帝国大学工学部本館大講義室において、九州国際文化協会の発会式が挙行された。この模様は新聞各紙においても報じられ、９月17日付の大阪毎日新聞では「国際親善めざす九州国際文化協会きのふ九大で発会式」の見出しで報じられた。九州国際文化協会はこの後、1943年（昭和18）11月まで活動を続けることとなる。九州国際文化協会の会員名簿によれば、会員は九州帝国大学の教官であり、理事や顧問には教官に加えて九州帝国大学本部事務官、外務省、国際文化振興会から就任している。同協会の会員数は初年度が138名であり、その後順調に数を伸ばし、1942年度（昭和17）には177名であった[1)]。

なぜ、そしてどのような段取りで九州帝国大学に九州国際文化協会が創立されたのか。九州国際文化協会の創立事情を知ることのできる史料が九州大学大学文書館に残されている。それが今回紹介する『昭和十四年度　創立関係書類綴　九州国際文化協会』である。九州国際文化協会の創立事情を語るこの史料は、九州帝国大学が戦前期行ってきた「国際親善」の一端を知る上でも貴重な史料である。

『昭和十四年度 創立関係書類綴 九州国際文化協会』（以下、『創立関係書類綴』とする）は九州大学創立百周年記念事業の一環として刊行された『九州大学　百年史　写真集』にも掲載された史料である[2)]。『創立関係書類綴』はＡ４判よりやや小さめの綴込簿冊で、実寸271mm×194mmである。表紙には「昭和十四年度　創立関係書類綴九州国際文化協会」と記載されている（写真１）。この史料には、発起人会関係書類、予算請求関係書類、初年度事業関係書類が綴じ込まれている。

2．九州国際文化協会の創立に向けて

『創立関係書類綴』を開くと九州国際文化協会の創立に向けた発起人会の案内状が綴じ込まれている。この案内状は1939年（昭和14）５月８日付で総長・荒川文六名で送られた。同案内状には「先般外務省文化事業部当局よりの示唆も有之この際当福岡に於て国際的文化及親善の増進に資するために有志者の団体を結成致しては如何かと存ぜられた　就ては右の件に関して御相談申上…」とあり、外務省文化事業部の後援のもとに九州国際文化協会の創立が進められようとしたことが窺われる。この外務省文化事業部とは、対支文化事業と国際文化事業を所管する外務省の一部局であった。九州国際文化協会が創立された1939年（昭和14）当時、外務省の国際文化事業は最も規模を拡大した時期[3)]であり、外務省は国際文化事業費という予算をもとに、様々な国際文化事業団体に助成を行った。そして、九州国際文化協会も助成を受けた団体の１つであった[4)]。

案内状は医学部・大平得三教授、工学部・山口修一教授、農学部・大島廣教授、同・江崎悌三教授、法文学部・豊田実教授、同・小牧健夫教授、同・佐久間鼎教授、同・佐野勝也教授、同・三田村一郎教授、同・河村又介教授、同・大澤章教授、同・武藤智雄助教授、□□、会計課課長・豊田茂久蔵、庶務課課長・久保田藤麿の15名の教官と事務官に送付された。案内状送付の４日後の５月11日午後、喫茶店や映画館が軒を連ねる東中洲

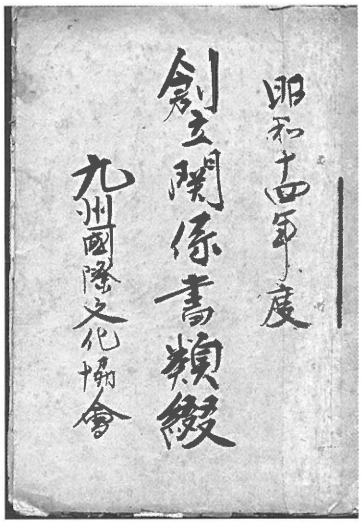

写真１

の生田喫茶店2階別室において発起人会が行われた。出席したのは荒川、大平、山口、大島、江崎、豊田（実）、小牧、佐久間、佐野、三田村、河村の教官11名であった。このときの会議に諮られたのは九州国際文化協会の会則の元となった「福岡国際文化協会設立要綱」であった。

さらに6月2日午後、荒川、豊田、大澤、武藤、河村の5名出席のもと、箱崎キャンパス本部庁舎総長室において実行委員会が開催された[5)]。同実行委員会では、第1回理事会を開催し、会名を「福岡」国際文化協会から「九州」国際文化協会に変更、会則案作成、外務省、国際文化振興会、文部省に顧問委嘱の4件が話し合われた。この話し合いの後だと思われるが、同日、第2回発起人会の案内状が送られている。第2回発起人会の案内状には「陳者豫ねて御賛同を得候国際文化協会設立の件その後も順調に進捗致し居候處、この際成るべく取急ぎ会の正式成立を決定致度候に就て…」と記されており、実行委員会において九州国際文化協会の創立を急いだ様子が窺える。

この第2回発起人会は6月6日午後4時から三畏閣菊の間で開催された。第2回発起人会要旨では決議事項として、「会則別紙ノ通リ。之ヲ以テ本会成立シタルモノト認ム」とあり、九州国際文化協会の発足日が1939年（昭和14）6月6日であることが記されている。発起人会に関係する書類からは、九州国際文化協会の創立に向けて、忙しく動き回る教官の様子が分かる。なお九州国際文化協会の性格を知ることができる重要な史料として、以下に「会則」を記すこととする。

九州国際文化協会々則

第一条　本会ハ九州国際文化協会ト称シ其ノ事務所ヲ九州帝国大学内ニ置ク

第二条　本会ハ日本ト諸外国トノ文化ノ交換殊ニ日本文化ノ紹介ヲ行ヒ兼ネテ諸外国トノ親善ニ貢献スルコトヲ以テ目的トス

第三条　本会ハ前条ノ目的ヲ達成センカ為ニ左ノ事業ヲ行フ

一　東西文化ノ研究
二　文化資料ノ蒐集、交換及寄贈
三　東西文化ニ関スル講義、講演、座談会、展覧会、映画会、演奏会等ノ開催
四　東西文化ニ関スル著述、翻訳及出版
五　学者、芸術家、学生等ノ交換
六　会館、図書室及研究室ノ設置並ニ経営
七　其ノ他理事会ニ於テ適当ト認メタル事業

第四条　会員ノ入会ハ理事会ノ決議ヲ経テ会長之ヲ決ス
内外人中名望閲歴アリテ適当ト認メラルル者ハ理事会ノ決議ヲ経テ会長之ヲ名誉会員ニ推薦ス
本会ノ趣旨ニ賛シ特別ノ援助ヲ與フル者ハ理事会ノ決議ヲ経テ会長之ヲ賛助会員ニ推薦ス

第五条　本会ニ左ノ役員ヲ置ク
会長　一名
理事　若干名（内数名ヲ常務理事トス）

第六条　会長ハ理事会之ヲ推薦ス
理事ハ会員中ヨリ、常務理事ハ理事中ヨリ、会長之ヲ選任ス
理事及常務理事ノ任期ハ一年トス但シ重任ヲ妨ケス

第七条　会長ハ会務ヲ統轄シ本会ヲ代表ス
理事ハ理事会ヲ組織シ重要ナル会務ヲ処理ス
常務理事ハ会長ヨリ委任セラレタル本会ノ常務ヲ管掌ス

第八条　本会ニ顧問若干名ヲ置ク
顧問ハ理事会ノ議ヲ経テ会長之ヲ委嘱ス
顧問ハ会長ノ諮問ニ応シ意見ヲ述フ

第九条　本会ノ事業費ハ政府ノ補助金、会員ノ醵出金、寄付金及其ノ他ノ収入ヲ以テ之ニ充ツ

第十条　本会ノ会計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第十一条　会長ハ毎年一回総会ヲ招集シ一般会務及会計ノ報告ヲ為ス

第十二条　本会々則ノ改正ハ過半数ノ理事ノ出席シタル理事会ノ決議ヲ以テ之ヲ行フ

この会則から、九州国際文化協会の目的が、「日本ト諸外国トノ文化ノ交換殊ニ日本文化ノ紹介」を行うことにあり、それを以て「諸外国トノ親善ニ貢献スル」ことであることが示されている。この目的のもとに会則第二条に挙げられた事業が行われてゆくこととなる。この会則のうち、「一　東西文化の研究」は当時、国際文化事業を牽引した国際文化振興会には見られず、九州帝国大学に創立された九州国際文化協会の1つの特色ある事業内容だったと思われる。

3．外務省から委託された事業

1939年（昭和14）６月６日に九州国際文化協会は成立したものの、即座に使える費用は手元になかった。成立から発会式までのおよそ３ヶ月間の間に、九州国際文化協会は予算請求、活動内容の具体化を進めることになる。会則第二条で列挙されている事業内容が具体化してゆく様を以下に述べる。九州国際文化協会の成立が６月６日であった。この日から２日後の６月８日、九州国際文化協会は早速外務省に宛てて「昭和十四年度補助金下付申請書」を提出する。以下、九州国際文化協会の創立期の予算関係書類を見ることで具体化してゆく事業内容を示すこととする。

会長の荒川文六から外務大臣・有田八郎宛で発出された「昭和十四年度補助金下附申請書」には協会の活動の位置づけが行われている。そこには「現下内外の情勢に鑑みて国際的に文化の交換を行ふ諸外国民との相互理解及親善に寄與することが最も緊要の時務たるは申す迄もこれ無き儀に御座候」とあり、このような状況の中で協会の活動が展開されてゆくことが述べられている。活動を行う上での予算として5000円が申請された。その内訳は「九州国際文化協会昭和十四年度事業費予算書」に記されている。それによれば創立費（500円）、講演及び座談会費（600円）、映画会、演奏会及展覧会費（1500円）、外国人名士学生見学団歓迎費（500円）、図書購入費及出版費（1300円）、事務費（600円）である。この段階ではまだ具体的な事業名は挙げられていない。

この書類を受けて、６月27日付で外務省文化事業部から5000円の助成許可が下り、助成金申請書の雛形一式が届くこととなる。その中には外務省からの「命令書」が含まれている。この「命令書」には、事業助成のために5000円を交付すること、交付金の収支を帳簿に記載すること、年度終了２ヶ月以内に収支計算書と事業経過報告書を提出すること、事業目的を達成しないと認められるときは交付金の返納を行うことの４点が記されている。これを受け、九州国際文化協会は「昭和十四年六月二十七日附命令書一通　右御命令ノ條項遵守スヘク依テ御請候也」と外務省に返信した。こうして外務省の「御命令」のもとに事業を展開し、具体化する為の準備が整えられたのである。

4．イタリヤ文化展覧会

「御命令」と「御請」の関係で、外務省からの補助金下付の見通しがついたことで、九州国際文化協会の事業が具体的に動き出す。『創立関係書類綴』には初年度事業関係書類も綴じ込まれている。そこには九州国際文化協会で最初に実現した事業「イタリヤ文化展覧会」関係書類が中心に収められている。九州国際文化協会の日報だと思われるが、６月30日から８月２日までの活動が記された書類が綴じられている。「イタリヤ文化展覧会」の開催決定までの準備は以下の段取りで行われた。

６月30日　補助金下付申請書を清書し外務省に発送
７月16日　外務省から補助金1600円が到着
７月25日　国際文化振興会に顧問委嘱状発送
７月27日　武藤助教授、河村教授が福岡日日新聞社を訪問してイタリヤ展覧会開催の協力を依頼
８月１日　武藤助教授が福岡日日新聞社より協力了承の電話を受け、８月９日に第１回理事会でイタリヤ展覧会開催の承認を得る手続きを決定
８月２日　理事会招集の案内状発送

「イタリヤ文化展覧会」については附属図書館会議室で８月９日開催の第１回理事会で承認を得て、九州国際文化協会が本格的に取り組む事業となった。そしてこの展覧会と同時に発会式も開催されることが決定し、会員募集も始めることとなった。展覧会の開催決定とともに、九州国際文化協会は本格的に活動を展開することとなったのである。イタリヤ文化展覧会の準備にあたり、法文学部の武藤助教授、河村教授が福岡日日新聞社を訪れ、展覧会の開催協力を依頼している。ここから大学の教官がキャンパスの外に出かけて、調査研究以外の場面で活動してゆく姿が垣間見え、興味深いところである。

5．結びにかえて

外務省の後援のもとに九州帝国大学内に創立された九州国際文化協会の残した『昭和十四年度創立関係書類綴　九州国際文化協会』は、九州帝国大学の教官たちが自分たちで事業を構想し、具体化していった様子を伝えてくれる。大学史において、教官たちによる学術団体での活動はこれまで明らかにされてきたものが多い。しかし九州国際文化協会のような団体の中で教官たちがどのような活動をしてきたのかは、これまでの大学史研究では触れられることは少なかったのではないか。今回紹介した史料『昭和十四年度　創立関係書類綴　九州国際文化協会』は、大学の構成員で

ある教官たちの研究以外での横顔が見える貴重な史料である。

1）拙稿（修士論文）『九州国際文化協会の研究』2011年1月。
2）九州大学百周年記念事業委員会『九州大学　百年史　写真集』2011年，83頁。
3）芝崎厚士『近代日本の国際文化交流　国際文化振興会の創設と展開』1999年，91-94頁。
4）拙稿（修士論文）を参照。
5）豊田が会計課長の豊田茂久蔵か法文学部の豊田実教授か史料からは判別できない。

（九州大学大学文書館）

九州大学大学文書館名簿

館　長		副学長	宮本　一夫
副館長	基　幹	教　授	新谷　恭明
専任教員	文書館	教　授	折田　悦郎
兼任教員	人文院	教　授	佐伯　弘次
〃	人文院	准教授	山口　輝臣
〃	法　院	教　授	植田　信廣
〃	法　院	教　授	熊野　直樹
〃	比文院	教　授	中野　等
〃	シ情院	教　授	荒木啓二郎
専任教員	百年史	准教授	藤岡健太郎
専任教員	百年史	助　教	井上美香子
テクニカルスタッフ			清原　和之
〃			徳安　祐子
兼任事務職員	総務課長		村松　哲行
事務職員			名切　光子
事務補佐員			川畑　由美
〃			山本　尚史
〃			境　良恵

（2014年10月1日現在）

大学文書館日誌抄録（2013年4月～2014年7月）

4.1（月）　名切光子氏（事務職員）着任。
4.3（水）　朝日新聞社記者、取材のため来館（九州大学大学文書館の件）。
4.8（月）　大学院医学研究院（外科学第二講座）より来館、大森治豊資料貸出。
4.9（火）　折田悦郎教授、新採用研修の一環として「九大の歴史にふれる」を講義（於旧工学部本館会議室）。
4.16（火）　「文書記録活動論」（大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻）開講（折田教授）。
4.17（水）　「大学とはなにか」（総合科目）開講（藤岡健太郎准教授）。
4.25（木）　第20回九州大学大学文書館委員会開催。
5.9（木）　西日本新聞社より創立記念日の件につき照会、回答。
NHK福岡放送局より創立記念日の件につき照会、回答。
附属図書館と共催で「シリーズ展示・箱崎キャンパスの近代建築　第1回　戦前の大学風景」を開催（～6月30日。於中央図書館2階常設展示コーナー）。
5.13（月）　大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻生、授業の一環として大学文書館視察のため来館。
5.15（水）　「伊都キャンパスを科学するⅠ」（総合科目）の一環として、折田教授「九州大学史と伊都キャンパス」を講義。
5.29（水）　百年史編集委員会開催（新谷恭明副館長、折田教授、藤岡准教授、井上美香子助教出席）。
6.4（火）　第21回九州大学大学文書館委員会開催（書面会議）。
6.10（月）　埼玉県立公文書館より大学文書館視察のため来館。
6.11（火）　平成25年度「国際アーカイブズの日記念講演会」において、折田教授「大学アーカイブズの現状と課題―

九州大学の場合―」を講演（於アークホテルロイヤル福岡天神）。

6.12（水）　宮内庁書陵部図書課宮内公文書館より大学文書館視察のため来館。
京都大学大学文書館より大学文書館視察のため来館。

6.17（月）　西日本新聞社より病院地区の歴史の件につき照会、回答。

6.24（月）　NHK福岡放送局より学徒出陣の件につき照会、回答。

6.25（火）　東京大学本部総務課、大学史史料室より大学文書館視察のため来館。

6.26（水）　NHK福岡放送局より取材のため来館（学徒出陣の件。8月5日、21日も同様）。
米国ベイツ大学歴史学部准教授、資料調査、大学文書館視察のため来館。

6.27（木）　福岡県立公文書館運営専門協議会開催（折田教授出席。10月24日、3月14日、7月17日も同様）。

7.1（月）　附属図書館と共催で「シリーズ展示・箱崎キャンパスの近代建築　第2回　戦争の痕跡／映画の舞台」を開催（～8月31日）。
東京大学法学部学生より九州帝国大学法文学部旧教官の件につき照会、回答。

7.8（月）　折田教授、藤岡准教授、総長面談。

7.9（火）　太宰府市公文書館構想調査研究委員会開催（折田教授出席。3月27日、7月7日も同様）。

7.10（水）　西日本新聞社より自校史教育の件につき照会、回答。

7.17（水）　沖縄テレビより電話取材。

7.18（木）　九州大学病院より資料寄贈。

7.19（金）　新任主任研修の一環として、折田教授「九大の歴史―箱崎キャンパスで学ぶ―」を講義（於旧工学部本館講義室）、大学文書館案内。
徳島新聞社より工学部肖像画につき照会、回答。

7.26（金）　沖縄テレビ放送より取材のため来館（学徒出陣の件）。

8.3（土）　附属図書館と共催で「九大キャンパスの風景―桂木勝彦写真展―」開催（～10月31日。於中央図書館3階回廊）。

8.5（月）　韓国ソウル大学校附属図書館より資料調査、大学文書館視察のため来館。

8.8（木）　和歌山大学本部、同附属図書館より大学文書館視察のため来館。

8.21（水）　太宰府市史編さん室より大学文書館視察のため来館。
西日本新聞社記者、取材のため来館（学徒出陣の件）。

8.23（金）　本学名誉教授（大学院工学研究院）、大学文書館視察のため来館。

8.28（水）　大学講堂展示実行小委員会開催（折田教授出席）。

8.30（金）　東京大学副学長、大学文書館視察のため来館。

9.2（月）　日本経済新聞社記者、取材のため来館（旧工学部航空工学科本館の件）。

9.4（水）　附属図書館と共催で「シリーズ展示・箱崎キャンパスの近代建築　第3回　学生の集う場所」を開催（～10月31日）。

9.6（金）　愛知大学事務部より大学文書館視察のため来館。

9.12（木）　NHK放送センターより学徒出陣の件につき照会、回答。
北九州市門司麦酒煉瓦館長、大学文書館視察のため来館。

9.18（水）　施設部施設企画課より資料受領。

9.19（木）　九大フィルハーモニー会より資料寄贈。

9.20（金）　松山大学法学部准教授、資料調査のため来館。

9.25（水）　奈良工業高等専門学校講師、資料調査のため来館（～27日）。
荒川文六元総長ご遺族一行、大学文書館視察のため来館。

9.30（月）　九州産業大学名誉教授、資料調査のため来館（10月1日、11月19日、20日も同様）。

10.3（木）　読売新聞社記者、取材のため来館（学徒出陣の件）。

10.4（金）　「九州大学の歴史」（少人数ゼミ）開講（折田教授）。

10.17（木）　広島大学文書館より資料調査のため来館。

10.23（水）　古河機械金属九州支店より資料調査のため来館。

10.25（金）　附属図書館と共催で「音楽の夕べ」を開催（於中央図書館2階リフレッ

シュルーム)。以後、第2回(11月1日)、第3回(11月5日。於芸術工学図書館3階セミナー室)、第4回(11月8日)、第5回(11月15日)開催。
志學館大学参与、大学文書館視察のため来館。

10.28(月) 日本経済新聞社記者、取材のため来館(旧工学部造船学科船舶海洋工学実験室の件)。

10.29(火) 田川市石炭・歴史博物館より資料調査のため来館。

10.31(木) 『九州大学大学文書館ニュース』第37号刊行。

11.5(火) 北海道大学大学院工学研究院助教、資料調査のため来館(3月10日、11日も同様)。

11.14(木) 参議院法制局より大学文書館視察のため来館。

11.26(火) 総務部総務課より資料受領。
塩川郁夫氏(元本学技官)より資料受贈(2月17日、3月4日、24日も同様)。

11.28(木) 藤本乙次郎(九州帝国大学医学部卒)・藤本玄一氏(同法文学部卒)のご遺族より資料寄贈。

12.2(月) 早稲田大学教育・総合科学学術院教授、大学文書館視察のため来館。

12.6(金) 附属図書館と共催で「シリーズ展示・箱崎キャンパスの近代建築 第4回 最先端の研究の場として」を開催(~1月31日)。

12.17(火) 学習院大学大学院アーカイブズ学専攻より大学文書館視察のため来館。

12.26(木) 藤野清次教授(情報基盤研究センター)来館、資料寄贈(2月3日も同様)。
『九大広報』百周年特集号刊行(折田教授「創立記念日、シンボルマーク、誘致・設置運動」を掲載)。

2.6(木) 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会大会・研修委員会より来館(7月28日も同様)。

2.14(金) 文部科学省高等教育局学生・留学生課より大学文書館視察のため来館。

2.17(月) 新谷副館長、折田教授、藤岡准教授、総長面談。

2.19(水) 大学院法学研究院より楢崎弥之助関係資料寄贈(3月26日も同様)。

3.12(水) 麗澤大学外国語学部教授、大学文書館視察のため来館。

3.13(木) 田村圓澄名誉教授(文学部)ご遺族より資料寄贈。

3.24(月) 総務部法令審議室より資料受領。

3.25(火) 林健志名誉教授(生体防御医学研究所)来館、資料寄贈。

3.26(水) NHK放送総局大型企画開発センターより昭和天皇本学行幸の件につき照会、回答。

3.27(木) 企画部企画課より資料受領。

3.31(月) 『九州大学大学史料叢書』第20輯刊行。

4.1(火) 山本尚史氏(事務補佐員)着任。

4.3(木) 長崎大学名誉教授、資料調査のため来館(8日、14日、5月8日も同様)。

4.8(火) 総務部総務課より資料受領。

4.9(水) 学内の法人文書の移管につき総務部総務課と打ち合わせ(16日、17日、5月30日、6月23日、7月4日も同様)。

4.14(月) 大学院人文科学研究院教授、資料調査のため来館(6月12日、7月1日、16日、28日も同様)。

4.15(火) 日本経済新聞社記者、取材のため来館(福岡医科大学創立の件)。

4.16(水) 「大学とはなにか—ともに考える—」(総合科目)開講(藤岡准教授)。

4.17(木) 新採用職員研修の一環として、折田教授「九大の歴史に触れる」を講義(於旧工学部本館講義室)。

4.18(金) 長崎新聞社記者、取材のため来館(旧工学部採鉱学科実習報告書の件)。
福岡共同公文書館長、大学文書館視察のため来館。

4.23(水) 第22回九州大学大学文書館委員会開催。

4.24(木) 折田教授、『九大広報』「シリーズ九大人」のため小林晶氏(医学部卒業生)へインタビュー。

5.16(金) 田村圓澄名誉教授(文学部)ご遺族、資料寄贈のため来館。
岐阜大学准教授、資料調査のため来館(6月12日、13日、7月18日も同様)。

5.28（水）　折田教授、福岡県佐賀県大学図書館協議会総会にて「戦前期福岡県における高等教育機関―大学アーカイブズ・『年史』（編纂）の活用を通じて見た―」を講演（於附属図書館中央館視聴覚ホール）。
5.29（木）　西日本新聞社記者、取材のため来館（九州大学大学文書館の件）。
6.4（水）　北九州イノベーションギャラリー（KIGS）より資料調査のため来館。
6.5（木）　財務部資産活用課より資料受領。
6.17（火）　中村学園大学附属図書館図書課長、大学文書館視察のため来館。
6.26（木）　折田教授、山本事務補佐員、京都大学大学文書館視察のため出張。
6.27（金）　学務部学生支援課学生支援係より資料受領。
7.2（水）　空閑龍二（元本学事務官）氏来館、資料寄託。
7.3（木）　古河機械金属株式会社より大学文書館視察のため来館。
7.11（金）　学務部学務企画課より資料受領。
7.12（土）　折田教授、長崎大学経済学部講演会において「大学資料の整理・保存活用について」を講演（於長崎大学）。
7.18（金）　折田教授、新任主任研修にて「九大の歴史を学ぶ」を講義（於伊都キャンパスゲストハウス）。

百年史編集室日誌抄録（2013年10月～2014年7月）

10.25（金）　藤岡健太郎准教授、法学部部局史編打合せ列席。
10.28（月）　藤岡准教授、第18回文学部歴史編纂室会議列席（1月17日、4月24日も同様）。
1.7（火）　藤岡准教授、統合新領域学府第5回部局史編集委員会列席。
4.2（水）　藤岡准教授、統合新領域学府第6回部局史編集委員会列席。
4.16（水）　第12回百年史編集小委員会開催。
4.23（水）　第11回百年史編集委員会開催。
5.30（金）　「九州大学百年史　資料編Ⅰ」公開開始。
小野保和氏（事務補佐員）退任。
6.6（金）　事務局部局史編打合せ。
7.1（火）　境良恵氏（事務補佐員）着任。

九州大学大学文書館ニュース　第38号
Kyushu University Archives

発行日　2014年11月30日
編集・発行　九州大学大学文書館
〒812-8581 福岡市東区箱崎6－10－1
Tel:092-642-2292　Fax:092-642-7646
印刷　株式会社ミドリ印刷